

令和5年度第2回林業アカデミーふくしま運営会議 議事概要

- 1 日 時 令和6年2月6日（火） 13：30～15：30
- 2 場 所 林業アカデミーふくしま講義室（県林業研究センター敷地内）
- 3 出席者 別紙出席者名簿のとおり

4 結 果

（司会進行：渡部主任主査）

○挨拶 柳田農林水産部森林林業担当次長

令和5年度林業アカデミーふくしま就業前長期研修は、昨年4月7日から始まり、第二期生はこれまでに各種研修やインターンシップなどに日々努力し、実践力を着実に身につけており、早いもので来月の修了を迎えようとしている。

また、今年で三年目となる短期研修においては、市町村林務担当者や林業従事者等、多くの方々に受講いただき、業務で必要となる森林・林業の基礎知識や実務、森林施業の技術などを学んでいただいた。

本日は、第1回会議での御意見を踏まえた対応や、今年度下半期の就業前長期研修、短期研修の運営状況、令和6年度第三期研修生の募集状況について御説明するとともに、令和6年度の研修計画等について、委員の皆様より御意見や御助言をいただきたいと考えている。

限られた時間ではあるが、皆様には忌憚のない御意見を賜るようお願い申し上げます。

○議事（議事進行：金子座長）

議題（1）令和5年度下半期の活動報告

【事務局】

（資料1～2に基づき説明）

【委員の意見】

（資料1について）

〈飯沼委員〉

筆記試験の結果は今後の研修にどのように反映されているのか。

昨年度の試験問題または試験範囲は予め研修生に伝えているのか。

《事務局》

試験の正答が6割満たない者については補講を行っている。1～2名の不合格者がいた。昨年度の試験問題は見せず、試験範囲のみ伝えておき実施している。

主に、座学の小テストから出題しており。学び直しを目的としている。

〈田子委員〉

林業架線集材研修について、今後、県内で皆伐再造林が進んでいき、車両系で難しい現場にアプローチしていく必要があると考える。

林業架線集材の重要性について改めて研修生に伝えた上で研修を行なってほしい。

《事務局》

今後のカリキュラム作成の参考にする。

(資料2について)

〈小松委員〉

市町村職員の参加者数について、延べ66名となっているが、もっと参加してもらうためにどのように取組むのか。

《事務局》

参加者にアンケートを取って見直しを行ってきた。より多くの方に参加して貰うためにも、出来るだけ早めの周知、PRを行いたい。

〈丹治委員〉

定員オーバーの研修もあれば、定員を割っているものがあるが、6年度の研修の定員に反映させているか？

座学なのか現場なのか資料の作りを視覚的にわかるようにして欲しい。

《事務局》

令和3年度～5年度にかけて研修を行ってきたが、事業体向けの研修についても参加しやすいよう改善していった。資料7で説明する。

〈飯沼委員〉

研修の質について、参加者アンケートによれば、簡単、難しいなど様々な意見があったようだ。全ての方に対応した内容をアカデミーで実施するのは中々難しいと思う。

アカデミーのみで背負うのではなく、県の普及員も研修に参加するとともに、各普及地区に見合った研修を行うなどして、県の施策に位置付けて取組んで行って欲しい。

議題（2）令和5年度就業前長期研修生の状況

【事務局】

（資料3に基づき説明）

【委員の意見】

〈金子座長〉

既に就職先が決まっている14名について、本人の第1希望の事業体へ行くのか。

《事務局》

はい。第1希望となっている。

〈金子座長〉

毎年、県内で新たに林業に就業される方の人数は何人なのか。

《事務局》

年毎に統計取っている。令和3年が100名、令和4年が107名と、微増ではあるが少しずつ増えてきている。

〈金子座長〉

100名の中にアカデミーの修了生も含まれることになると思うが、採用する側から見て、アカデミー生とそうでない新規就業者で何か違いはあるか？

〈田子委員〉

これまで、いわき市森林組合においては異業種から林業をやりたくて訪れた方がかなりいたのだが、その方の林業に対するイメージと現場（給料等を含む）がマッチング出来ず、数ヶ月もしくは数年で離職すること多かった。

研修生一人ひとり考え方の違いはあると思う。今年もインターンで来た研修生1名いたが、アカデミーで資格を取得することで、林業に対する覚悟が出来ているように思う。林業に従事するにあたり天候、暑い、寒いなど気象状況様々ある中で、この仕事をやる、技術を学ぶという意識がアカデミー生は今までの人と違うと思う。

〈金子座長〉

アカデミーの特色としてそういう点があると大変心強い。

《事務局》

先程の新規林業就業者の推移について、補足する。

平成27年が101名であったが、平成28年～令和2年まで70～80名で推移してきて、令和3年100名、令和4年107名となっている。

県の農林水産業振興計画の指標にもしているが、平成27～29年度の平均定着率約55%となっている。やはり、田子委員の仰るようにイメージ先行で入ってきた方は定着が難しいという側面があると思う。ただ、アカデミーで学んでいる研修生の感触を聞くところによると、最初は頼りなくても、卒業の頃にはたくましくなって出て行くと聞いている。

〈金子座長〉

良い流れが出来てきたかと思う。

〈平子委員〉

毎年100名ずつ入ってきているとのことだが、実際、毎年100名以上が林業をやめているのではないか？

〈事務局〉

5年毎に行われる国勢調査の結果によれば、平成12年に2,200名だった林業従事者が、平成17年に1,755名に減ったものの、平成22年には2,181名となっている。その後も平成27年、令和2年も同様に2,200名弱となっている。

仰るとおり100名の方入り、100名の方辞めているようにも見えるのだが、お年を召して辞められる方もいる。高齢化率が上がっているわけではなく、統計的に見ると若い方が入って来ている。人数は先細っているわけではなくほぼ横ばい。この人口減の情勢においては、むしろ増えていると状況を分析している。

〈金子座長〉

こういう言い方は良くないかも知れないが、農業全体と比べてみると良いかもしれない。実は、農業従事者と比べると林業従事者の方が元気だという統計が出れば、我々としては（対外的に）使いやすい。「林業は皆元気だ」というような使い方が出来れば。

〈平子委員〉

田子委員の仰るとおり、ここで一年間学ぶことで覚悟ができた状態が入ってきている感じはある。取りあえず林業に入ってみようという人がいて、夏の下刈りの現場できつくて辞めてしまうこともある。林業に対する覚悟を持った人材が毎年10名以上業界に入ってきてくれるというのは我々にとって非常にありがたいことだと思う。

〈金子座長〉

意欲の高い方が集まっている。人材としては非常に良いと思う。

〈飯沼委員〉

定着率の定義について、林業という産業への定着率を指すものではなく、就職したその事業体についての定着率であるので、例えばAという林業の会社は辞めたがBという林業の会社へ就職するという場合もある。統計上その数字ははっきりとわからないところもある。我々の研修をやっている中で、結構林業業界で頑張っている方がおり、より自分に合った事業体に入り直すこともよくあるようだ。もう少し実態をつかんで、事業体がどのような姿を目指さなくてはいけないか、また担い手確保にどのような施策で取り組んでいくべきかなど、これから介入すべき大きな課題と考える。

〈金子座長〉

林業アカデミーでそういう人材を育成するということに期待したい。

〈五十嵐委員〉

長期研修では高卒者と社会人経験者が半々ぐらいいると思うが、他の仕事を経験してアカデミーに入ってきた人は目的意識や覚悟が強い印象だ。高卒者は未だ世の中のこともわからないことが多く、林業って良いかもとか、先生に勧められてという方の中にはいると思う。一年間でたくさんのカリキュラムをこなすわけなので、それらをきちんと身につけるのは難しい。

また、資格を取って来ているからといって、つい受け入れ側も色々やらせてしまうところがあるのかもしれないが、特に高卒者は社会や仕事についてまだまだ分からないことも多いので受け入れ側がそれらを教える仕組みが無いと難しい。

ただただ毎日辛いだけで、辞めたいという気持ちにさせてしまうのはもったいなく、これは受け入れ側の責任になると思う。

研修生を受け入れる事業体の体制は、今後問われるようになると思う。もしこのようなことが早いスパンで発生するのであれば、受け入れ側に改善する視点がなくてははいけないし、研修生をサポートしていく必要がある。

〈金子座長〉

これについてはアカデミーだけではカバーできないと思うので、皆様の御理解が必要と思う。

議題（3）令和6年度に向けた就業前長期研修生の応募状況

【事務局】

（資料4に基づき説明。）

【委員の意見】

〈五十嵐委員〉

高校推薦について、県内のどの高校からでもエントリーできるのか。

例えば私立など、高校によっては「推薦しない」という選択肢もあるのか？

《事務局》

県立、私立、県内外どの高校からでも受け入れる。

二期生においては進学校から来ている研修生がいる。アカデミーは9月に推薦選考の出願手続きがあるが、進学校の場合は推薦手続きの解禁が出願期間の後になるので推薦を受けられず、一般選考で受けて受かった方もいる。

〈金子座長〉

高校の仕組として推薦選考に間に合わない方もいるということ。

研修生募集は県内の高校、また隣県の学校にも周知をおこなっているのか。

《事務局》

県内の全ての高校に募集案内等を送付している。

また、隣県の実業系高校にも送付している。

〈金子座長〉

先程、高卒者と社会人を経た方の違いに関する議論があったが、色んな方がマッチングできると良いと思う。

〈掃部委員〉

周知の仕方は郵送のみになるのか。直に話すことで林業への進路に繋がっていくこともあると思う。

《事務局》

県内の実業系、キャリア形成校には訪問し、進路指導の先生に直接案内をしている。また、隣県の高校としては茨城県立大子清流高等学校に足を運んでいる。

また、高校の総合学習の時間において、磐城農業高校などが林業の現場見学会を実施しており、その中でアカデミーを訪問してもらい体験等やっている。

なお、今年の合格者1名は高校生林業見学会の参加者である。

〈飯沼委員〉

県中農林事務所が管内のある高校を対象に高校生林業見学会を実施しており、卒業生が毎年1名ずつ林業への就業者がいるようだ。来年は3名おり、うち2名がアカデミー入講予定と聞いている。

アカデミーの活動だけでなく、県の林業行政が今までずっと取り組んできた活動が徐々に効いて来ているのだと思う。県の施策的な幅を拡大して今後も続けていって欲しい。

《事務局》

林業従事者の裾野広げる取組については、アカデミーの取組は直接的に林業に直結している。

それ以前に、林業という職業があるということ、自然の中で働くことに喜びを得られるということについて、幼少期のうちから意識の醸成が重要と考えている。今までは緑化や植樹祭などの取組のほか、小中学生を対象に森林環境学習をやってきたのだが、ここ数年はもう少し若い子どもたちに対してもこういった取組を行っている。こうした取組が平成18年に始まって以来ようやく実を結んでいるところである。今までやってきた取組と、直接的に林業に直結するアカデミーの取組、見学会等を通じて、人材育成に取り組んでいきたい。

〈金子座長〉

今後、研修修了された方が増えたときに、こうした普及の場に協力していただけると良いと思う。

議題（４）令和6年度研修計画

【事務局】

（資料5～資料7に基づき説明）

【委員の意見】

（長期研修について）

〈丹治委員〉

資料5の長期研修シラバスについて、4ページにある通り、令和4年度から令和5年度にかけて、チェーンソー伐木造材技術の実習時間大幅に増やしたと思う。前回の

会議でも申し上げたが、せっかく1年間研修するので、出来るだけ幅広い知識を身につけてもらい、その上でチェーンソーの実習を行ってはどうか。今回のシラバスを見直して欲しいと言うつもりはないが、今回も社会人教養、森林文化のコマを一部削ってチェーンソー実習を30時間程度増やしている。それも大切ではあるが、中々こういう研修の場でないと出来ない知識や土台となるようなものが無くなるのはもったいないと思う。そういう視点も大事にして欲しい。

《事務局》

出来るだけ研修生に興味をもってもらい記憶に残るような研修にしていきたい。

〈丹治委員〉

今回のカリキュラム見直しを考えるにあたり、1年間の研修を経て就業している一期生の、「もう少しこうして欲しかった」などの意見なども反映しているのか。

《事務局》

今年の7月と10月に一期生から意見をもらう場を設けている。

一期生から技能的なこともっとやって欲しいとか、一部専門的なことについても意見を貰った。主に技能的な部分について意見を反映し見直しに至っている。

〈平子委員〉

架線集材研修について意見を反映してもらい、ありがたい。特に、本県は中通りを除いて山が急峻である。これから必ず役にたつと思うので続けて欲しい。

チェーンソー実習の時間を増やしていただいたのはありがたい。ただし、確実にこれというものはない。講師によって考え方、教え方異なる。

今後、技能検定など行われると林業の技術というものが確立していくと思う。

なるべく林災防として関わり、安全で的確な技術を教えていきたいと思う。

《事務局》

架線集材については、資格取得のおかげでスイングヤーダの架設が自分たちで出来るようになるぐらい技能が身についた。

チェーンソー実習については、T-FORESTの高橋氏を来年度のチェーンソー伐木造材技術研修の講師に迎える予定でいる。これまで教えていただいた秋山氏とともに、世界伐木チャンピオンシップ競技において優秀な方であるが、あくまで競技のための実習ではなく、安全な伐倒技術を正確に実践するための基礎を教えていただくものである。

事業体に就職すればそれぞれの考え方がある。色々な方から教えを得ることで就職先の指導者の方と対話ができる土台をつくる目的でチェーンソー実習を進めていきたい。

〈平子委員〉

架線集材の時間は長いので、それにかなりの時間を割いているが、とても勉強になるので100時間講習の時間をもったいないと思わないで欲しい。

〈五十嵐委員〉

林業架線集材研修について、資格を取る場所が遠いので、長期研修で一般の方が一緒に受講することはできないか。

《事務局》

林業架線集材研修は、もともと林災防が行う研修にアカデミーが参加するという体でやっており、今年も研修生以外の方で1名受けた。申し込みすれば受けられる。

〈田子委員〉

小さなお願いであるが、育苗に関する実習が年2日間に増えたことについて、現場を担う立場としては非常にありがたい。苗の素性の良いものでないと、良い成長に繋がらない。特に裸苗には品質の良し悪しはかなりある。成長の状態、品質、良し悪し、わかる人であって欲しい。

勿論、2日間で全てが分るようになるとは思っていないが、そういう意識を持った林業従事者となって欲しい。

一回植えれば何十年、その木と森林所有者は付き合いなければいけないので。

アカデミーと講師が、そのような意識で持って研修生に教えて欲しい。

《事務局》

是非、いただいた意見を講師に伝えたうえで実施していきたい。研修講師は上原樹苗の上原氏で、非常に熱心に教えていただいている。アカデミーとしても研修生にそのような視点で研修に望むように指導したい。

〈飯沼委員〉

資料6-1のフロー図について、アカデミーで習得できるものの全体図だと思うが、ぱっと見たところ機械の操作の仕方の『資格取得』しか見えてこない。

それだけでなく、森林の持つ公益的機能、森林のあるべき姿、そのためにどのような森林整備が必要か、間伐の仕方、選木の仕方など『林業の技能』との2本立ての構成にして欲しい。誤解が無いように次に資料作るとき工夫してはどうか。

《事務局》

御意見を踏まえ、次回の資料作成に向けて内容を検討したい。

(短期研修について)

〈飯沼委員〉

路網整備と作業システム研修について、この問題は難しいと思う。幅広い中身であり、一つ一つ掘り下げると深い。例えば、主伐にかかる作業システムといっても、皆伐と択伐ではシステムが全く異なる。今回はどのポイントについて研修するかを明確に打ち出して、募集したほうが良いのでは。我田引水になるが、県森連と実施した皆伐・再造林の現地研修について、内容は作業システムが主であったが、27名程度集まった。特に、参加者が困っていることについてポイントを絞ったことで興味を持っ

てもらえたと思う。もちろんこの研修で全てを網羅することは出来ないが、この課題解決への入口となり、皆様に広めていってもらえるようになれば良いのではと考えている。

《事務局》

事業体の方が分るように、内容を決めるなどの工夫をしたいと思う。

〈平子委員〉

プランナー研修は、フォローアップ研修のことか。一次研修を受ける場がなくなるのではないか。

《事務局》

これまでのフォローアップ研修ではプランナーを受ける方向けの一次研修という位置付けであったが、来年度一次研修は実施しない。今のところ3年に1回の開催を想定し、フォローアップ研修を2年やって、翌年に一次研修のつもりだが、とりあえず来年一年やってみて、要望を踏まえながら令和7年度の研修計画を考えたい。

〈平子委員〉

一次研修はプランナーを受けるにあたり必ず受けなくてはならないものか。

《事務局》

必ずしも受けなくてはならないもので無い。試験において、一部優遇措置あるが。

〈平子委員〉

現状、森林組合はプランナーが増えてきているが、民間の林業事業体においてはまだ少ないので、もう少し増やした方が良いのではと思う。

議題（5）研修修了者の定着に向けた取組について

【事務局】

（資料8に基づき説明）

【委員の意見】

〈五十嵐委員〉

まだ二期生なので、どんなことを学んで林業の世界に出るかが注目されているが、これが年数を重ねてくると、事業体で十分に力を発揮しつつ、安全に仕事が出来て、生活に十分なお金を稼げるかどうか定着率に関わってくると思う。当方も小さな林業会社なので、情報を共有しつつではあるが、それぞれの事業体、森林組合において仕事環境をどのように整備していくかを全体でバックアップしていくように段々シフトしていく必要があると思う。今こうしようと言うことではないが、今後も議論していく必要がある。林業は土木事業に比べ賃金の設定が曖昧である。是非、県のほうで林業に対する地位を確定するというようなことが出てくるか。アカデミーだけでなく、どのようにバックアップ体制を整えるかを共有出来ると良いと思う。

〈田子委員〉

五十嵐委員の意見に同感である。アカデミー出身者をはじめ、林業を目指す方の定着率には、受入側の体制整備や経営方針が大きく影響すると考える。林業の公共事業の単価は土木と比較すると厳しいところがある。経営をぎりぎりで運営している部分もある。今、世の中がカーボンニュートラルやSDGsで追い風が吹いていることから、一般市民や、林業・林業以外の事業者からも理解をいただいて、環境をこれ以上悪くしないために、林業者頑張れ、山の手入れを頼む、というように林業に応援をいただけるよう、行政も森林組合も機運を盛り上げて、就職した社員が自分の人生設計を描けるようにしなければ定着率を上げることは難しいと考える。

〈金子座長〉

今から2年後の定着率に向けて色々なアイデアあると思うので協力よろしく願いしたい。

〈飯沼委員〉

就業3年後の定着率55%ということだが、当協会においては緑の雇用事業を行っており、3年後定着率は約7割である。県内の高校新卒者の就職3年後の定着率と同程度である。緑の雇用の研修を受けることができるのは、認定林業事業体に所属している方に限定されるが、認定事業体以外に就職した方においても何らかの研修が受けられるような制度があっても良いと思う。というのは、全ての会社が認定を目指さなくても良いと個人的には考えており、一人親方や自伐林家などを林業就業の良さとして残しつつ、うまく支援していく施策が必要と考える。

議題（6）その他

《事務局》

令和6年度第1回運営会議は8月開催を予定。

以 上